「教育課程実践モデル事業」実践研究校中間報告会に向けて

１月 25 日（木）の「教育課程実践モデル事業」実践研究校中間報告会及び手錢教諭の研究授業、そして学校全体での「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した、古典Ｂ、生物、英語、体育の授業実践公開まで、あと少しとなりました。

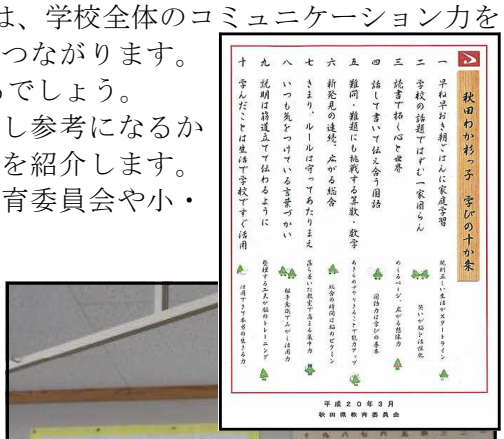
中間報告会では、次の①～④のことを１年次の課題として取り上げる予定です。先生方が課題の内容を理解していただけるよう、今回は内容の説明などをしたいと思います。

①今年度は、特に英国数の担当者を中心に取り組んだが、その取り組みを、**カリキュラム・マネジメント**を働かせて、いかに教科全体、さらには学校全体に浸透させていくか。
②**エビデンスを確かなものに**しながら、いかに**共同省察**を深めて、教科で得た課題を全体の課題としてとらえていくか。
③授業の「**問い**」と、評価の一つとしての試験の「**問い**」を、どう有機的に連動させていくか。
④授業改善において、**授業のねらいから振り返りまで**の流れ、広義では学習指導案などを、どこまで学校で統一していくか。

①のキーワードである「カリキュラム・マネジメント」については、これまで EAST 通信でも取り上げてきたところなので、ぜひ再読して下さい。

②の「エビデンスを確かなものに」という点では、今年度アンケートの作成や分析に苦慮しました。このため、島根大学と連携して、ルーブリックの作成に向けた取り組みをはじめます。まず２月 15 日（木）にワークショップを実施します。また、「共同省察」については、平成 26 年度の島根県教育センター共同研究「授業改善に向けた教育センターの支援の在り方（３年次）～主体的・効果的な授業改善に向けた自己省察・共同省察の在り方～」から紐解きました。そこでは、「省察＝授業実践に変化を起こすことを意識した振り返り」「授業実践における省察の過程＝良さや問題点に気付き、原因や背景を分析し、明確な目標設定と具体策を講ずること」としています。言い方を換えれば、省察とは、【良い実践をみる→自己省察する[モニタリングし、そしてまねる（モデリングする）]→さらに共同省察を図るとともに、コミュニケーション力の向上や協働性・同僚性の構築も図る→そしてコントロールする（自分のものにしていく）】こと。その過程で自分なりの教授理論を高めていくことです。特に、共同省察は大切です。自己完結（自己省察）のみだと、省察力を高めることに必ずしもつながりません。共同省察を意識することは、学校全体のコミュニケーション力を高めることになりますし、協働性・同僚性を高めることにつながります。まさにそのことが、カリキュラム・マネジメントとも言えるでしょう。

③、④については、内容を考える上で、秋田の教育が少し参考になるかもしれません。今から４年前に秋田県を訪問した時のことを紹介します。以下は、バスケットとロケットで有名な秋田県能代市の教育委員会や小・中学校で話されたことをまとめたものです。



秋田では当たり前のことを、継続的にやっていくことで力をつけてきたと思っている。その典型が「秋田の学びの十か条」（*写真の右側の掲示物）の徹底。これはすべての小学校・中学校で掲示し、意識的に指導を図っている。

学校も授業改善に向けて、ＰＤＣＡを愚直に丁寧に回している。授業改善の課題としては、例えば小学校では次のことがよく上がる。

・教師の指示や説明が長く、学びがない。
・発表する時の相手意識（対児童か教師か）が児童にない。
・課題提示の工夫。教科書通りではなく、生活体験などから学習課題をつくり、児童主体になっているか。
・子どもが伝え合う場をきちんとつくり、そうしたいと思う課題を児童主体につくっているか。

こうした課題の解決を、校内研修の活性化や育てたい子ども像の共有意識の高まりで図ってきた。

また、共通の学習形態として、授業のめあて（学習課題・問い）を黒板等に必ず明示している。

さらに秋田では、振り返りや評価をとても大事にしている。それが家庭学習の習慣につながっている。家庭学習については、とかく授業の延長（予習や復習などの宿題）にあるというケースが多いが、秋田県は宿題をこなすものでなく、知的好奇心をくすぐるものだと意識している。当然、授業でできるようになったことを定着させることも目的の一つであり、そのためのドリル的なものも家庭が協力してしっかりさせている。反面、家庭での手伝いの時間が全国的に少ないという課題があるが、これはうれしい悲鳴かもしれない。また、「家庭学習の手引き」をつくっている学校がほとんどで、児童生徒と保護者両方に渡して、さらにリーフレット的なプリントを家で掲示してもらっている。ＰＴＡや保護者懇談会などでも話題にして、理解とその浸透を図っている。

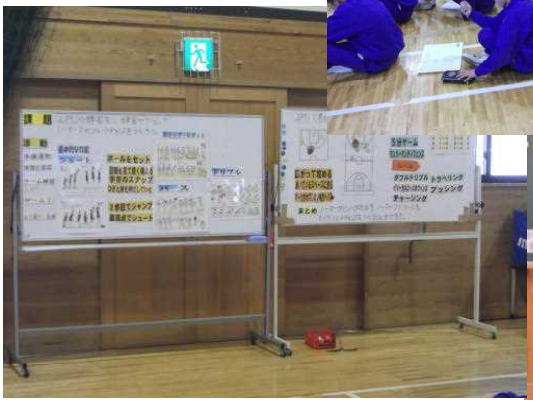
秋田は、教師がわかる授業、楽しい授業をするために、研修への参加意欲も高い。楽しい授業とは、思考力・判断力・表現力が重視された授業であるという意識をすべての教員が持っている。そのため、 児童生徒の授業や家庭学習への意欲も高い。だからなのか、整理された適切で工夫されたノートをつくっている児童生徒がほとんどである。

教員は、学習意欲向上のために、児童生徒のがんばりへの適切な評価を大事にしており、例えばどんな課題・宿題でも提出されたものには必ず朱書きでコメントを入れている。さらにシールで意欲高揚を図っている。シールだけ、スタンプだけはありえない。シールなどの外的誘因だけでなく、教員の朱書きによる内的誘因と合わせて学習意欲を高めている。授業の中でいいことをしたら、いい発言をしたら、教師がしっかり評価をしている。

実際訪問した向能代小学校及び東雲中学校では、全ての授業でめあてが明示されており、学校にはそうした学習の流れを明示するためのマグネットシートも常備されていた。ちなみに、平成 26 年度の島根県教育センター共同研究「管理職による授業観察実践事例集」で紹介された中学校でも、「**めあて**（学習課題）**の**、**お**（覚える）**な**（なぜ）**か**（考えよう）**ま**（まとめ）カード」なるものが全教室準備されていた。島根県でもそうした取り組みが広がって来ていることは確かである。また、評価の話を聞きながら、山本五十六が、「**誉めるとは共に喜ぶこと**」と言ったことを思い出した。生徒指導の三機能（「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的な人間関係を育成する」）がうまくいけば、学校のことを家庭で話す。そのことで、家庭が学校を理解し協力もしてくれる。それで家庭や地域との連携も進み、子どもの学力も高まっていく。そんな好循環も感じた。

「できない人を一人にさせない風土が秋田にはある」と話された方もいた。だから、学び合いも成立する。向能代小での授業で、授業の終末で今日のめあてに達成できていないと思う人と先生が言われた時、一人の児童が手をあげた。それを助けるために、先生が教え込むのでなく、また、とりあえずわかった形にもっていくのでなく、児童が発言や助言を一生懸命その児童におこなって（そのこと自体が言語活動になっていた）、最後にその子がわかったと言ったときは、自然と教室に拍手が起きていた。

小・中学校のことをそのまま高校に持ち込むことはできないが、授業改善のヒントはあるように思う。次の中間報告会を、授業改善を学校全体で考えていく契機としたい。

【写真は東雲中学校での様子】

左の写真は体育の授業風景。めあてや授業の流れなどがホワイトボードで示してある。授業の最後にはプリントに振り返りを記入して何人かが発表していた。他の授業でも全体で発表や説明をする活動が多くあった。